

# 県立多治見病院 緩和ケアチーム通信

発行：県立多治見病院緩和ケアチーム 2017年12月号 vol.81  
文責：須藤由美子・長谷部千夏 編集：櫻田亜矢子

こんにちは。管理栄養士の須藤です。

今年1年も残りわずかとなりました。月日が経つのは早いですね。

緩和ケア病棟では、治療の過程で食事が食べられなくなった患者さんにも、希望があれば可能な限り食事を食べてもらっています。久しぶりに食物を口にされ、「おいしかったよ」

「ありがとう」と笑顔で言ってくださる言葉に励まされることも多く、改めて食べることの大切さを感じています。

病院での栄養管理は、必ずしも口からではなく、病状により経腸栄養や静脈栄養を選択しなければならないこともありますが、「食べること」が患者さんの「生きること」、「楽しみ」「喜び」に繋がっているのだということを忘れずに、これからも関わっていきたいと思います。

栄養状態の悪い方、食事の進まない方がありましたら、栄養管理部までご相談ください。管理栄養士が病室に伺って食事内容の調整を行ない、少しでも摂取量が増えるよう対応しています。



薬剤師の長谷部です。先日「沸騰するほどの熱い愛」をみました。

宮沢りえさん演じる主人公が、末期がんと診断されて、そこから死を迎えるまでに家族の絆のために奔走する映画です。

映画の中で、印象に残ったシーンの一つは、死が近いと感じた主人公が、幼少期に自分を置き去りにした母のもとを今にも倒れそうなほどの体調で訪れます。しかし娘は居ないと言われ、思わず主人公は、門にあった置物を握って母の居る家に投げ込んでしまう。

もう一つは、家族から、「支えるから」というサプライズなメッセージを受け取り、「死にたくないよ」と泣きながらつぶやく主人公。

自分の力では思い通りにならない、どうすることもできない現実に向き合うことってとても辛いことで、そんな思いを抱えた人達と私は日々出会っているのだと映画をみながら感じました。

涙腺の弱い私は翌日二重瞼がなくなり、子どもには入り込みすぎると言われましたが映画であっても、人の悲しみや喜びを押し量り、共感して涙することって、時には必要だと思った次第です。



## \*緩和ケア勉強会開催報告\*

12/14(木) 第5回緩和ケア勉強会を開催しました。

今回のテーマは『うっ血性心不全の緩和ケア』でした。

院内24名、院外17名、合計41名の参加がありました。

